



第21回植物園シンポジウム
ふるさとの植物を守ろう

ナショナルコレクション

貴重な日本の植物遺産を後世に伝える

日時 2023年3月5日(日) 13:00~16:00

会場 京都府立植物園 研修室

主催 公益社団法人 日本植物園協会・京都府立植物園

第1部 ナショナルコレクションの概要と認定コレクション紹介

京都府立植物園の保全の取り組み

「アマミアセビとリュウキュウアセビの遺伝資源コレクション」

「野生のハスおよびキバナハスのコレクション」

京都府立植物園 平塚 健一

「武田薬品京都薬用植物園命名ツバキ品種群」

武田薬品工業株式会社 京都薬用植物園 小島 正明

「巨椋池(おぐらいけ)由来のハス」

宇治市植物公園 柳 明宏

「兵庫県立フラワーセンターストレプトカーパス属コレクション」

兵庫県立フラワーセンター 廣瀬 健司

「兵庫県立フラワーセンターウツボカズラ属の原種の系統保存コレクション」

兵庫県立フラワーセンター 土居 寛文

「変わり葉ゼラニウム品種群」

広島市植物公園 島田 有紀子

第2部 絶滅危惧種アマミアセビとリュウキュウアセビ見学会



ナショナルコレクション紹介

「植物遺産」 日本で栽培される貴重な植物を守り、伝える

ナショナルコレクション委員会 古平栄一



日本では野生植物の約 1/4 が絶滅危惧種に選定され、古くに作出された栽培品種の多くも失われつつあるのが現状です。このような現状に鑑み、日本植物園協会では 2017 年 7 月より「野生種、栽培種に関わらず、日本で栽培されている文化財、遺伝資源として貴重な植物を守り後世に伝えていく」ことを目的に、ナショナルコレクション認定制度をスタートさせました。審査に合格した貴重な植物遺産を「日本植物園協会ナショナルコレクション」として認定することで、認定コレクションを永続的に保全し、かつ情報を集約、公開することで我が国の自然環境保護・植物文化の継承と発展に貢献することを目的としています。令和 3 年度末に新たに 5 件を日本植物園協会ナショナルコレクションとして認定し、平成 29 年 7 月よりこれまでに認定されたものは計 14 件、2,201 種類となっており、それぞれ保全が図られています。

ナショナルコレクションは、園芸文化が盛んなヨーロッパにおいて消えゆく園芸種を守っていくために成り立った概念ですが、そのままの考え方を導入したのでは我が国の植物文化には馴染みにくい側面もあります。そこで、より分かりやすく理解していただくために「植物遺産」という言葉を用いて表現することになりました。その考え方のもとに、HP の更新、パンフレットの作成や更新、配布、シンポジウムの開催などの啓発活動を行っています。今後は、ロゴマークの使用条件の整理、商標登録の決定を通して、認定団体、認定者へのメリットも意識した運営を目指していきたいと考えています。また、環境省受託事業である生息域外保全情報管理システムとの連携を行うこ

とで、データベース化への準備を進め、より信頼性の高い取り組みとなるよう努力してまいります。

ナショナルコレクション制度は我が国における文化財、遺伝資源として貴重な植物の社会的価値と保全体制の向上に強く寄与することができます。広く社会にその植物の価値が知られることで、さらに内容が充実し、保全に対する責任度が増すこととなります。今まで以上に多くの人の目に触れることでさらなる価値や認知度が高まることにもつながります。同時に、危険分散や将来の橋渡し、情報公開や認定者の交流、情報交換も期待されます。

これからも日本植物園協会のナショナルコレクションへのご理解とご支援をいただきますよう、何卒、よろしくお願い申し上げます。皆様のコレクション申請を心よりお待ちしております。

※ナショナルコレクション認定制度の概要や申請については、日本植物園協会ホームページをご覧ください。

<http://www.syokubutsuen-kyokai.jp/nc/>



認定コレクション一覧

第 1 号

「武田薬品京都薬用植物園命名ツバキ品種群」
武田薬品工業株式会社京都薬用植物園

第 2 号

「神代植物公園サクラソウ品種コレクション」
神代植物公園

第 3 号

「巨椋池（おぐらいけ）由来のハス」
宇治市植物公園

第 4 号

「兵庫県立フラワーセンター ストレプトカーパス属コレクション」 兵庫県立フラワーセンター

第 5 号

「兵庫県立フラワーセンター ウツボカズラ属の原種の系統保存コレクション」
兵庫県立フラワーセンター

第 6 号

「江戸時代の奇品植物」 浜崎 大

第 7 号

「変わり葉ゼラニウム品種群」 広島市植物公園

第 8 号

「能登地域に残る江戸キリシマ系ツツジ古木群」
特定非営利活動法人のとキリシマツツジの郷

第 9 号

「中部のツバキ品種コレクション」
中部の椿品種保全会

第 10 号

「小田急山のホテル 庭園のツツジ」
小田急電鉄株式会社

第 11 号

「アマミアセビとリュウキュウアセビの遺伝資源コレクション」 京都府立植物園

第 12 号

「野生のハスおよびキバナハスのコレクション」
京都府立植物園

第 13 号

「日本花の会 サクラの種・品種コレクション」
公益財団法人日本花の会

第 14 号

「江戸椿を中心とする国営武蔵丘陵森林公園のツバキコレクション」
国営武蔵丘陵森林公園都市緑化植物園



‘紫霧島’と‘本霧島’

第 8 号
能登地域に残る江戸キリシマ系
ツツジ古木群



彩の広場

第 13 号
日本花の会 サクラの種・品種
コレクション



桜草花壇

第 2 号
神代植物公園サクラソウ品種
コレクション

京都府立植物園の保全の取り組み

京都府立植物園 平塚 健一



京都府立植物園では「アマミアセビとリュウキュウアセビの遺伝資源コレクション」及び「野生のハスおよびキバナハスのコレクション」2点がナショナルコレクションとして認定されている。

リュウキュウアセビは溪流沿いに生え葉身が細く薄く典型的な溪流植物の特徴を持つのに対してアマミアセビは山頂付近の岩上に自生し葉身が太く肉厚で耐乾性、耐光性に優れている。

「アマミアセビとリュウキュウアセビの遺伝資源コレクション」

リュウキュウアセビは沖縄などに自生するツツジ科の常緑低木で溪流沿いに自生する。そのうち奄美大島に自生するリュウキュウアセビについて2010年に京都大学瀬戸口浩明が葉や花の形態の比較、DNA分析の結果に基づいて地元植物研究者故前田芳之氏と共同でアマミアセビ *Pieris amamioshimensis* として新種記載を行った。しかしながら環境省のレッドリストも含め一般にはリュウキュウアセビとして取り扱われることが多い。



リュウキュウアセビ
Pieris koidzumiana



アマミアセビ
Pieris amamioshimensis

奄美大島に自生するアマミアセビおよび沖縄本島に自生するリュウキュウアセビは、アセビと比べて大きな花を咲かせ観賞価値が高いため、園芸目的の採取により1970年代以降急速に個体数を減らし、リュウキュウアセビは環境省レッドリスト2020では絶滅危惧IA類に、またアマミアセビは鹿児島県では絶滅危惧I類に指定されている。

京都府立植物園は、2005年から奄美大島の民家の庭先や試験場、種苗業者などに残っている個体から挿し穂を譲り受けて苗を育て、DNAによって個体識別を行い、両種あわせて152個体(99遺伝子型)を自生地および栽培地から収集し、遺伝資源コレクションを構築した。本コレクションは、自生地への植え戻しにあたって十分な遺伝的多様性を有すると考えられ、自生地への植え戻し、現地の小中学校への植樹及び啓蒙活動などに活用している。

「野生のハスおよびキバナハスのコレクション」

ハス属を含むハス科は、かつて今よりも多様で広く分布していたことが知られている。

現存するハス属 2 種のうち、ハスは、古代から人との関わりが深く、食用や観賞を目的として交配がくり返されたため、原種や現在の分布に至った経緯が明らかでない。

一方、キバナハスは、野生個体かどうかは比較的判断しやすい。京都府立植物園では、2006 年から本格的なハス属の収集を開始し、海外での調査等で採集された野生種 2 種の 19 系統 121 個体を保有する。

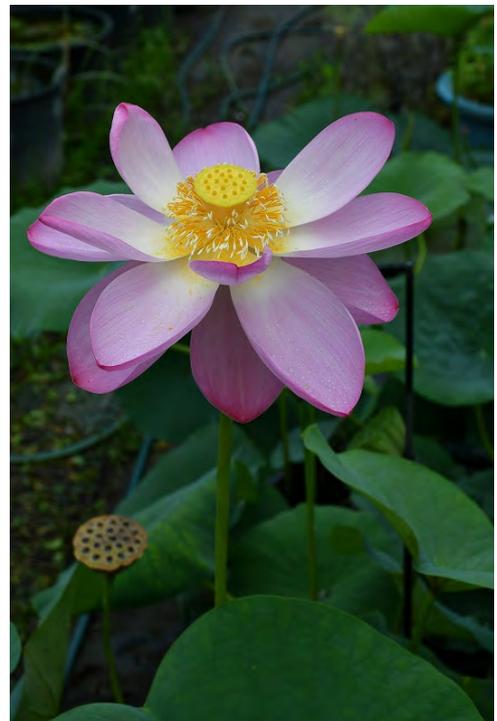
今後、野生植物の海外からの導入はさらに困難になることが予想され、現有の野生ハス属コレクションを保全する必要性および緊急性は非常に高い。

野生ハスは栽培が難しいため、自生地調査で計測した水質や水温などの環境データを実際の栽培に活用している。その中でユーラシア大陸東部地域のハスと北米大陸中東部地域のキバナハス（高緯度地域産）を電照による長日条件下で栽培を行い開花結実させることが出来た。

本コレクションは、ハス属の保全だけではなく、原種が持つ形質、生態的特性、栽培品種との遺伝的關係、および分布拡大の経過などを解明・考察するうえで重要である。



ハス
ロシア ユダヤ自治州 No.2



ハス
中国 黒竜江省 No.1

「武田薬品京都薬用植物園命名ツバキ品種群」

武田薬品工業株式会社 京都薬用植物園 小島 正明

京都薬用植物園で保有するツバキ系統は、当社六代武田長兵衛が1956年にハワイの知人のもとを訪れた際、日本に自生するユキツバキの分譲を依頼されたことを契機に収集が開始されました。収集されたツバキ系統の保存場所として、園内南西部にある山地の麓から頂上にわたってツバキ園が造成され、現在では約1haの敷地面積に505品種が植栽展示されています。植栽展示品種の内訳は、国内で作出された323品種、当園で命名した138品種および外国から導入した44品種となっています。

当園で命名した138品種は、1956年から1960年にかけて、北は山形県から南は沖縄県の17府県から収集された系統であり、お茶の水女子大学教授津山尚理学博士により既存品種とは異なる形質をもつことが明らかにされました。これら新しい形質をもつ138品種に対して当園で品種名がつけられており、品種の特性等について津山尚理学博士編著の『日本の椿¹⁾』にまとめられています。当園で命名した138品種のうち、来歴が明確な121品種について、日本植物園協会のナショナルコレクション認定制度に申請し、2018年6月19日に第1号の認定を受けました。

ナショナルコレクションに認定された品種の導入元を府県別にみると、ユキツバキ系品種を導入した富山県、石川県、

新潟県の順で多く、これら3県で91品種が収集されました。次いで京都府で10品種が収集されました。この中には都市開発から救出することを目的に、当園に移植された、伏見桃山の武家屋敷に伝わる推定樹齢200年以上とされる古木（後に‘桃山’、‘修学院’と命名される）も含まれています。以下、13府県で原木や原木の穂木の形態で20品種が集められました。121品種を花色別に見ると、最も多い紅色系が61品種、桃色系が32品種、白色系が15品種、そして絞り系が13品種となっています。花形で大別すると、一重咲きが最も多く39品種、次いで八重咲きが32品種、唐子ならびに獅子咲きが25品種、二重咲きが14品種、千重咲きが9品種、宝珠咲きが2品種という構成になります。

現在では新たなツバキ品種の収集については積極的には行っておらず、これまで収集した品種について、健全に育成する施策を実施しています。今後も、遺伝資源としてツバキの品種を後世に残し、これらの普及活動をしていくことが、当園に課せられた大切な役割であると考えます。

¹⁾津山尚(1969)日本の椿。武田科学振興財団。



ナショナルコレクションに認定された品種‘修学院’



ツバキ園の歴史を物語る多種多様な品種

「巨椋池(おぐらいけ)由来のハス」

宇治市植物公園 柳 明宏



宇治市植物公園は 1996 年 10 月に京都府南部にある宇治市南西部の西側がひらけた丘陵地に開園し、今年で開園 27 年目になります。広さは約 10 ヘクタールで、起伏があり、それを生かした人工の小川や池などがある施設です。

当園が位置する宇治市と隣接する京都市伏見区、久御山町にはかつて巨椋池(時代によっては大池や大椋池などとも)とよばれた面積約 800ha の大きな池があり国内産水草の 80%余りが生育する水生植物の宝庫でした。北は桂川、南は木津川、東は宇治川が流れ込む合流地点で一般的に想像する池ではなく水量によって大きく形が変わる遊水地でしたが、1933 年から 1941 年にかけて国営干拓事業の第 1 号として農地へと姿を変えました。

巨椋池にいつ頃からハスが生育していたかは不明ですが、久御山町に伝わる話に、用明天皇(在位 585~587 年)がハスを読んだ御歌が登場しています。江戸時代から昭和にかけての文献にはハスの名所として巨椋池が紹介され著名な文人などがハスを楽しんだ記述があります。当時は約 100ha のハスの群生地があったといわれています。

巨椋池のハスの品種は内田又夫氏(1922~2005 年)と西村金治氏(1915~2010 年)の両氏によって現在に残っているといっても過言ではありません。内田氏が幼少期に遊んだ巨椋池を懐かしみ、1970 年頃から干拓され農地になった、かつての巨椋池を巡り、幼芽などの採取を始めました。西村氏は 1977 年に内田氏の活動を新聞で知り、それをきっかけに一緒に活動を始め、巨椋池に咲いていたハスの保存や

普及など目的とした「京都花蓮研究会」を発足させました。両氏が中心に収集し、栽培した巨椋池由来のハスは 100 品種を超え、花色は、白、紅、爪紅、桃、斑とあり、花形も一重や八重があり変異に富んでいます。しかし、現在なくなってしまった品種もあるため京都花蓮研究会では 92 品種を巨椋池由来のハスとしています。

当園では巨椋池の地元にある植物園として 1999 年より、京都花蓮研究会や巨椋池土地改良区からレンコンを分譲していただき、ナショナルコレクションの申請後も京都花蓮研究会の初代会長のご子息の内田裕夫氏のご厚意により多くの品種分譲していただき、現在(2022 年)では 85 品種を栽培展示しています。ハスは毎年 3 月の彼岸頃から 1~2 週間をかけて植え替えを行っています。ここでは品種が混ざらないように注意を払いながら、ラベルのチェックや更新を行っています。開花時には品種の確認を行い、わからないものについては京都花蓮研究会の協力のもと品種を確認しています。また、花が散った後の果托は摘み取り交雑した種子を付けないようにしています。

宇治市内の小学校では地元の自然について自分たちで学ぶ授業があるため、かつて巨椋池だった場所にある小学校に巨椋池由来のハスをお譲りしています。今後は教育の場にも巨椋池由来のハスを活用し、現存する巨椋池由来のハスの品種をすべて集め、地域で守っていくことができると考えています。



‘内田爪紅’

‘春日森’

‘巨椋の鳳凰’

「兵庫県立フラワーセンター ストレプトカーパスコレクション」

兵庫県立フラワーセンター 廣瀬 健司



令和2年2月に兵庫県立フラワーセンターストレプトカーパス属コレクションが、植物園協会ナショナルコレクションに認定された。本コレクションは兵庫県立フラワーセンター育成品種57品種とその改良に密接に関わった原種、栽培品種あわせて188種類である。ストレプトカーパスは、南アフリカの温帯から亜熱帯にかけて自生するイワタバコ科の多年草で、通称セントポーリアは現在ストレプトカーパス属に分類されている。兵庫県立フラワーセンターでは長年イワタバコ科の保全収集に努めてきた。なかでも、ストレプトカーパスについては1980年代にその多様性に着目し、育種を進めることとした。これまで日本ではほとんど行っていないことから、アメリカの The Gesneriad Society や海外の研究者から新たな情報、原種および海外育成園芸種を導入しそれらを利用して、赤紫、青、白以外の色の品種を作出した。その後さらなる海外からの導入と独自の交配育種を続けた結果、これまでになかった黄花品種や小型で多く花をつける品種などの開発に成功した。ストレプトカーパスの栄養系品種を交配育種するうえでの目標が3点あり、①花の色や形が特徴的であり草姿と花茎のバランスが良いなど形質が優れている個体を選抜すること、②繁殖性が高いこと、③耐暑性に優れていることである。

セントポーリアについては新たなタイプの栽培品種を作出することを目的として、これまで交雑に使われていなかった上弁と下弁の2色咲きのゴエゼアヌス種を導入し、ゴエゼアヌス



ストレプトカーパス・ゴエゼアヌス

種の栽培特性および開花習性の解明と栽培管理技術や交雑について研究した。

近年、特に西日本は非常に暑くなったため、暑さをやや苦手とするストレプトカーパスにおいて、夏越しの方法について改良する必要性が生まれた。

ピートモスから軽石中心の用土へ変えるため配合割合について試行を重ね、季節により水の与え方を変えるなどの改良を進めた。栄養成長と生殖成長の時期に与える肥料やその濃度、回数を変えることでより多くの花が咲く肥培管理など、新しい栽培技術を模索している。園内外での育て方教室でそのことを伝え、園内での特別展示会や販売会を通じてその魅力を伝えることで愛好家を増やすことに努めている。

平成24年にこれまで各属を紹介する展示から、室内園芸におけるイワタバコ科植物の利用方法を目的とした展示にリニューアルした。展示室内にトンネルを設け、自宅の玄関先のニッチやテラスなどインドアガーデンでの飾り方を提案した。今では人気スポットの一つになっている。

コレクションを保全し続けることは重要であるが、実際には多くの労力がかかるため難しい。次世代のスタッフに保全することの楽しさや奥深さを伝えること、ストレプトカーパスをより普及させるために、その魅力について発信し続けることがこれからの課題であると考えている。



ストレプトカーパス '慶月'

「兵庫県立フラワーセンターウツボカズラ属の原種の系統保存コレクション」

兵庫県立フラワーセンター 土居 寛文



■ ナショナルコレクションを利用した取り組みについて

ウツボカズラ属は開発、環境悪化などにより減少の一途をたどっています。雌雄異株のため種子からその種の個体を得るには両方の株が必要になります。近年、幾つかの種類については、当園で保有する同一エリア産で雌雄どちらも保有する株を使っての交配に着目し、種子からの再現繁殖を行っている。今回は2種類の再現を紹介します。



N. ampullaria var. *vittata* (0019) 雌



N. ampullaria var. *vittata* (0020) 雄

×



このように両種の間接的な個体、両親にはない色合いなどが出てきた。正しく現地で確認した多くの個体と似ている結果となった。

また、0019 を母体として、同現地由来のラフレシアナ (*Nepenthes rafflesiana*) を交配し、種間雑種 (現地では見つけることができなかった) × *N. hookeriana* も作出した。

これらの個体は親株程度まで生育させ、展示を行うほか、普及にも貢献したいと考えています。

「変わり葉ゼラニウム品種群」

広島市植物公園 島田 有紀子



変わり葉ゼラニウムは、ペラルゴニウム属のゾナレ・グループ(Pelargonium Zonal Group、通称ゼラニウム)の中で、葉の斑模様や形、質感等が特異的に変化した葉芸をもつ品種群です。

広島市植物公園が保有する43品種が2020年12月15日に日本植物園協会のナショナルコレクション第7号に認定されました。これらは大正時代から生産、販売していた専門業者や趣味家から収集したもので、現存する品種のほとんどを網羅する日本最大のコレクションです。

海外から急激に西洋花卉が渡来した明治時代。欧米で花壇用のカラーリーフプランツとして利用されていたゼラニウムが明治末期から大正時代にかけて輸入され、大正3年春に新潟県の植木屋がその斑の美しさに着目して発表したことにより各地に知れ渡りました。全国各地で同好会組織が結成されて銘鑑が作られ、大正3～5年(1914～1916年)と昭和2～4年(1927～1929年)には大ブームを巻き起こし、伝統園芸植物のように扱われました。

西洋文化の一端として舶来のイメージのまま広められたバラや洋ランなどとは異なり、輸入時の品種名は日本名に付け変えられ、飾り鉢に植えられて観賞されました。さまざまな葉芸の中でも、冬に紅葉する品種や葉先に黄色い斑が現れる品種からは、日本人が好む四季の移り変わりを感じるができます。このようにもともと花壇素材であった外国産のゼラニウムは日本に輸入された後、日本人の価値観と美意識によってアレンジが加えられ、オリジナル化していきました。

輸入初期の品種は、葉の薄い大葉系が中心で、枝変わりや珍しいものが現れるとそれを固定していました。大正4年頃に輸入された黒雲龍及び紫雲龍は葉の厚い小葉系で、より色彩豊かなものであり、これらをもとに日本独自の交配による実生栽培に発展していきました。

しかしながら、昭和14～15年(1939～1940年)にまた流行の兆しが見えるも、その後の戦争により人気は次第に衰え、戦後は葉芸よりも花を觀賞する品種群に人気に移り、変わり葉ゼラニウムはその存在すら忘れ去られていきました。現在は極少数の個人愛好家及び生産者が丈夫な品種のみを栽培している状況であり、もはや消失の危機に瀕しています。

本品種群は虚弱である上に枝変わりが生じやすい性質であることから、その品種の本芸を維持したまま保存するには高度な技術と知識、多くの労力を要します。当園では、当時本品種群を生産・販売していた専門業者から直接聞き取り調査や資料調査を行うなどし、栽培史と品種の写真、記録を残しています。

毎年3～4月に開催される「ゼラニウム展」において、本品種群はペラルゴニウム属約650種類のコレクションの一部として展示しています。加えて、銘鑑や図譜(写し)を紹介するほか、展示解説を開催するなど、それにまつわる文化もあわせて後世に残す活動をしています。

今回は、日本人の感性が垣間見られる品種の美しさと、かつて大ブームを巻き起こした歴史を紹介します。



第21回植物園シンポジウム ふるさとの植物を守ろう

ナショナルコレクション 貴重な日本の植物遺産を後世に伝える

主催：公益社団法人日本植物園協会・京都府立植物園

※ナショナルコレクション認定制度の概要や申請については、
日本植物園協会ホームページをご覧ください。

<http://www.syokubutsuen-kyokai.jp/nc/>





**National
Collection**
জাতীয় সংগ্রহ কেন্দ্র
সংরক্ষণ

